

内倉真一郎個展『浮遊の肖像』開催記念トークイベント 姫野希美氏 × 内倉真一郎

日 時: 2022年7月9日(金)18:00～

会 場: KANA KAWANISHI PHOTOGRAPHY

登壇者: 姫野希美(赤々舎・代表) × 内倉真一郎(進行:河西香奈)



■目次■

[〈『私の肖像』と『浮遊の肖像』〉](#)

[〈俯瞰でみる〉](#)

[〈意識からこぼれ落ちた瞬間〉](#)

[〈宗教画と仏像〉](#)

[〈ポートレート〉](#)

[〈質疑応答〉](#)

〈『私の肖像』と『浮遊の肖像』〉

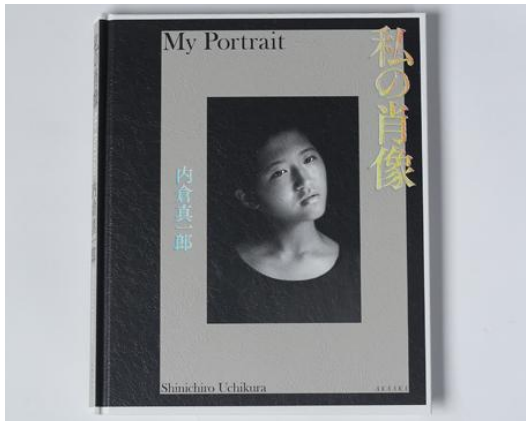
河西: 現在開催しております内倉真一郎さんの個展『浮遊の肖像』のオープニングトークイベントをはじめたいと思います。本日は、京都の赤々舎より姫野希美さんにお越しいただきました。どうぞよろしくお願いいたします。

赤々舎からは、2020年に『私の肖像』という内倉さんの写真集が出ているのですが、今回の『浮遊の肖像』はこの発展版という位置付けで発表されています。

姫野: こちらのシリーズは内倉さんから度々見せていただいていたのですが、内倉さんのなかで『浮遊の肖像』は『私の肖像』の派生という位置付けだと今はじめて知りました。さきほど、このシリーズの作品をまとめて拝見しましたが、すごく興味深いですね。今日はみなさんと同じような目線でいろいろと質問をしながらお話を伺いたいです。

内倉: ありがとうございます。

河西: それでは、まず『私の肖像』をご覧になっている方はいらっしゃいますか？



写真集『私の肖像』(2020年、赤々舎)より
© Shinichiro Uchikura, courtesy KANA KAWANISHI GALLERY

観客：(ちらほらと会場で手があがる)

河西：ありがとうございます。時系列的には、内倉さんは『私の肖像』のあとに、今回の『浮遊の肖像』を撮られていましたね？

内倉：そうです。2020年10月にこの場所で『私の肖像』の個展を行いまして、その後2021年ごろから何をどう撮ろうかと考えていました。そのときは「どのように撮ろう」より前に「どのように見よう」と考え、このシリーズが始まりました。

姫野：ご存知の方も多いと思いますが、内倉さんは宮崎県の延岡市で写真館をされていて、その写真館へいらしているお客さまに声をかけて、いわゆる記念撮影とは別に撮ったものが『私の肖像』です。今回の『浮遊の肖像』もやはり写真館にくる方々を撮影されているのでしょうか。

内倉：そうですね、写真館にいらしたお客さまもいますし、その方の知り合いや、あとは恒例ですが僕の娘と息子です。



個展『私の肖像』(2020年、KANA KAWANISHI PHOTOGRAPHY) 展示風景
© Shinichiro Uchikura, courtesy KANA KAWANISHI GALLERY, photo by Yoshiaki Nakamura

姫野：『私の肖像』でも内倉さんの家族がすごく活躍していましたね。一見すると、身内のつながりが完全に切れているようにも見える作品でした。

河西：身内に対する視線も、まったく他の被写体と変わらない、写真家として向き合っている凄みがありますよね。

姫野：このシリーズでも写真館にいらっしゃるお客さまやその知り合いの方が被写体になっていて、相変わらず黒バックで撮影されていますけど、今回は上から撮っているんですよね？

内倉：はい、スタジオにある2メートル30センチくらいの大きな脚立を使っています。そのてっぺんまで登って、下を覗き込むようにして撮影しています。かなり危ない状況で撮っているのですが、シャッターは2、3枚しか切っていません。

『私の肖像』のときは、1回につき、500枚から1000枚ほど撮っていました。これはカメラの話ですが、やはりカメラにはシャッター回数に限界があるんです。だから当時使っていたカメラのうち1台はこの撮影で完全に壊れてしまいました。

前回とは違い、今回のシリーズでは数枚しか撮っていないのですが、先ほどもお伝えしたとおり撮り方の違いからです。

姫野：脚立の上に立っているから、3メートルを超える高さから覗き込むということですからね。カメラを真俯瞰で構えての撮影は、たくさん撮れるものではないんですね。



個展『浮遊の肖像』展示風景

© Shinichiro Uchikura, courtesy KANA KAWANISHI GALLERY, photo by Yoshiaki Nakamura

内倉：撮影しているときは、実は被写体になっている人たちが一番大変なんです。みなさん横になっているので、あごが上がってしまわないように頭のうしろにクッションを入れています。それでももう少し顔を見せたいときは、シャッターを切るときに「せーの」で合わせて、頭を起こしてもらいました。足先も横に倒さないように立ててもらっていて、そういった動きがあると浮遊している感じがどんどんと出てくるんです。

また、今まで作品は自然光での撮影しかしたことがなかったのですが、今回ははじめてストロボ光を使って制作しました。というのも、浮かび上がっている感じや、ふわんと浮遊している感じで撮るためには、光を作り出す必要があったからです。これは昔でいう「お化けライティング」という下から光で照らす手法で撮影しています。

姫野：頭とつま先の角度を調整することが、浮遊感につながっているんですね。

内倉：あとは、鼻をできるだけ見せることです。鼻を見せるように撮ると、下から光をあてているので、鼻の穴にハイライトがくるんです。その小さなハイライトが反射したところが、まぶたに少しきたりするんです。それが美しいんですよ。

〈俯瞰でみる〉

姫野：「浮遊感」ということについて内倉さんへ伺いたかったのですが、これはどのように浮いていると思いますか？というのも、私がはじめてこの作品を見たときに、これをどのように見たらいいのかと考えまして。この人たちは、横になったまま上で撮っている内倉さんの方へ浮いてきているのか、それとも体が起きた状態で浮かび上がっているのか、どちらなのでしょう？

内倉：僕もそれについて考えていました。『エクソシスト』のように人が横になっていてそのまま浮かび上がっているように撮るのか、それとも『ウォーリーを探せ！』のような頭の上だけが写るように撮るのか、このシリーズをはじめる前にはいろいろと考えました。

姫野：なるほど。「ウォーリー」では画面のなかで人々の頭だけが写っていますけど、今はそうしていないですね。これらの作品は、頭の上だけが写るウォーリータイプではなく、横になったまま浮遊するエクソシストタイプが多いのかなと思っていて、でも必ずしもすべてがそうではないですね。私は内倉さんからこのシリーズを見せてもらっていて、いつもそれがどちらなのかなと考えていました。



photo by Yoshiaki Nakamura

内倉：最初にお話した「どのように人を見ようか」と考えたときに、悟りについての考え方をまとめたWEBサイトを参考にしました。癒しのホームページみたいなもので、宗教などとは関係ないのですが、ものごとを俯瞰で見るとより良く人生を歩めますよといったことを伝えているサイトです。

それを寝るまえにみていると、いつの間にか気持ちよく眠ってしまうんです。そこから、なぜ心地よくなるのかと考えはじめました。そのことがきっかけで、実際に俯瞰的に上から人物を見たらどんな風に見えるんだろうと思ったんです。普通ならまっすぐにはか人を見ないですからね。だから正面の等身大というところにこだわっています。宇宙的な目線というか、空から人を見るとどうなるのかなと考えました。

姫野：そのサイトには視点としての「俯瞰」について書いてあって、そうすると人はどのように写るんだろうと疑問に感じてきたということですね。そして、それが今回写真で表現することのきっかけになったと。

内倉：先ほど『ウォーリーを探せ！』についてお話しましたが、今日この作品を見ていて、そういえばこれがきっかけだったなと思い出したんです。僕は小さいころからウォーリーが大好きで、だから人を俯瞰で見ようと考えたときにすぐ紐づきました。それから携帯でウォーリーを眺めていたんですけど、とても多くの人たちが画面にいるんですよ。いろんな人種の人が、いろんな事をしていて、いろんな角度で写っている。それをピックアップしたらどうなんだろうなと思ったんです。そこから始まったシリーズなんですよ。

姫野：それは何だかとてもわかります。つまり俯瞰してみたら、人って実はそれぞれ面白いことをやっているということですよ。例えばラグビー選手が写る作品をみると、私たちはラグビーを知っているのだからこんなシーンがあるとわかるけれど、もしラグビーを知らないある種宇宙的な目線の人がみたら、密集したこの状況はどのように見えるのだろうと思いますよね。内倉さんがおっしゃっていることは、その視点に近い気がするんですよ。このお母さんが急いでカートにものを詰めて買い物をしている状況も、私たちには意味や背景がわかるけれど、それを切り離して意味が抜け落ちた状態でみると、この動作やものの動きなどはどのように見えるのだろうかと、そういった面白さがどれにもあるように感じます。



The Floating Portrait #006

2022 | archival pigment print | 1188 × 792 mm | © Shinichiro Uchikura, courtesy KANA KAWANISHI GALLERY

内倉：ありがとうございます。

姫野：そういうところがもしかしたらウォーリーの面白さなのかもしれませんね。そういった超越的な視線がピックアップの仕方に生きているような気がして、良い意味で可笑しいなと思います。あらためて私たちが日常で行っていることをそれぞれピックアップしてみると、多分こういう象徴的な何かの動きで出てくるんだなと思いました。そこで私がこだわりたいのは、どのように浮遊しているのかということです。

河西：ステートメントにも「浮遊してくるものは、肉体なのか魂なのか？」とありましたね。

姫野：そうですね。超越的な上からみている視線の方へ、横になったままむかってくる浮遊感というのをとても濃く感じると思うんです。ウォーリーの見え方なら、この角度にならなくても良いはずなので、撮っている自分の方へ浮いてくるというこの角度、視点で内倉さんが撮りたかったというところに興味が湧いています。

〈意識からこぼれ落ちた瞬間〉

河西：この展示空間にまず入ってきてこれらの一群をみると、圧倒されますよね。こういったポートレート写真をみたことがないですから。

姫野：ひとつは「浮いてきている」というあり方と、あとは「目を閉じている」ということが、やはりポートレート写真としては特別な感じがしますよね。目を閉じているものって特にないですから。なぜ目を閉じたかったんだろうということも気になっています。

内倉：これに関しては早い段階で決めていたのですが、はじめに脚立にのぼって撮ろうとしたときに、被写体の人がこちらをみていて目があつたんです。そうしたら、僕が思い描いていた「浮遊感」や「宇宙的視線」、「標本的なもの」が、すべて崩れ落ちたんですよ。やはりポートレートを撮っていると、人間の目ってすごく強烈で、目を開けるだけで違うメッセージが含まれてしまうんです。客観的な人の見え方をより伝えやすくするために、今回は皆さんに目を閉じてもらいました。



個展『浮遊の肖像』展示風景

© Shinichiro Uchikura, courtesy KANA KAWANISHI GALLERY, photo by Yoshiaki Nakamura

姫野：やはり目を閉じていると、自意識から少し抜け出せる感覚がありますよね。撮っている人と、撮られている人が、目が合っているのではなくて、撮られている人が目を閉じていると、見られているという状況から自由になれるじゃないですか。そういう意識の持ち方と、先ほどから話にでている浮遊感というものがリンクしているような気がします。というのも、重力から自由だなという気がしたんですよ。

どうしても人が帯びてしまう重力から、これらのポートレートが自由な感じがあって、そこがこの作品の特別なところなんだと思うんです。内倉さんは『私の肖像』のときから、500枚、1000枚とシャッターを切りながら、撮られている人たちが自分の意識から離れて、自分でも意識していない瞬間をセレクトしていますよね。つまり自分が自分でなくなる瞬間をこの『私の肖像』では見せてくれていて。今回の『浮遊の肖像』でも、人のもつ自意識とか、あるいは人が人であるところの重力みたいなものから抜け出した瞬間が込められているのかなという気がしています。

そういう意味で『私の肖像』と今回の『浮遊の肖像』が非常に結びついているところがあり、内倉さんが捉えたいのはそういう「見る・見られる」の関係からでてくる意識とかではなく、そこからこぼれ落ちてくる瞬間だったりするんだろうなと思いました。あとは意味づけからも切り離されてこの一瞬の動作や見え方があるんだろうなという気がしました。

河西：『浮遊の肖像』の作品も少しご紹介したいのですが、こちらは内倉さんの娘さんです。実はこの会場のなかにも娘さんの作品がありますよね。前回の作品のときはおいくつだったのでしょうか？

内倉：今は小学校5年生なので、このときは3年生くらいですね。



『私の肖像』より
© Shinichiro Uchikura, courtesy KANA KAWANISHI GALLERY

河西：これはプールから帰るとき、濡れた髪をかきあげた瞬間をみて「あっ」と思い、その場で車に乗せていた黒い布を張って撮影されたそうです。これだけみると、とても自分の娘を撮っているとは思えないような色気を感じる瞬間ですね。本人もこういう自分を演じようとは思っていないでしょうから、先ほど姫野さんがおっしゃった「ふとこぼれ落ちた瞬間」なのでしょうね。

姫野：もしかすると、これは肉眼では見えていない瞬間かもしれないですね。カメラのシャッターのスピードだからこそ残った瞬間であって、そういうことが内倉さんの作品の面白いところだなと思うんです。見ようとして見たものではないので。

内倉：そうですね。このとき実は、写真を撮るときにくしゃみをしたんです。これはくしゃみをする直前の表情なんですよ。そうでもない、小学校3年生にあの表情は絶対にできませんから。フィルムカメラだと連写では撮れないので、デジタルカメラだからできる切り口なんです。

姫野：そこにいるのが娘さんですか？

内倉：そうです。小学校5年生になって、給食当番の班長を任せてもらったんです。本人は嫌がっているんですけど、僕はちょっと嬉しくて(笑)。やっぱり少し変な顔をされるんですけど、学校の先生に、僕こういう写真を撮っていてと説明して、1時間だけ鍋を貸してくださいとお願いして撮りました。



The Floating Portrait #007

2022 | archival pigment print | 1188 × 792 mm | © Shinichiro Uchikura, courtesy KANA KAWANISHI GALLERY

〈宗教画と仏像〉

内倉：今回、あらためて展示している作品を見て、じわじわくるものがあったんですよね。

姫野：その感覚が、どこからくるのか知りたいです。どういう「じわじわ」ですか？

内倉：自分ってなんなんだろうなと思ったんです。自分の個展をみると、特にお客さんがいないときは、まさに俯瞰的に作品を見れますよね。次の作品へつながっていく、制作のもとになる現場でもあると思うんです。

先ほどから「宇宙的な目線で」などと言っていましたが、見れば見るほど、自分は神様でもなんでもないことがわかってくる。じゃあ、自分ってなんなんだろうと今日あらためて思ったんですよね。なんか、人間が人間を撮るって凄く不思議だなとあらためて思ったんです。だから人って面白いと思うのはやはりそこなんですよね。

ポートレートはいろんな切り口がありますよね。目を開いてカメラ目線で笑顔を見せたり、隠さなくてはいけない気持ちがある顔にでも、表情としては無表情だったり。例えばそんな「無」のなかにある隠された感情を写し出すような、その人の本質を写真で撮るのは、たぶん無理だろうなと僕は思うんです。

姫野：それは私もそう思いますよ。カメラって徹底して表面しか写らないというところに特徴があるわけで、何を持って「本質」といえるかということはすごくむずかしいと思います。だからポートレート写真が、その人の本質を写すみたいな見方をされることもあります。それは違うと思うんですよね。むしろどのように見ているのかという「視点」の方が際立つときの方が多くないような気がしますし、そもそも人の内面というものはなかなか触れ得ないものじゃないですか。内倉さんはこれらの作品を見て、自分はなんなのかと考えていたんですね。

内倉：そうですね、今日ずっと。しかも、このギャラリーは昼間はこの壁の裏から自然光がかなり差し込むので、昼と夜とで作品の見え方が変わるんです。だから、この壁から逆光の光が入ってきて、見ているとなんだか神々しく見えてきて。自分の作品なんですけど、そういうことを忘れながらただただ見ていました。



個展『浮遊の肖像』展示風景

© Shinichiro Uchikura, courtesy KANA KAWANISHI GALLERY, photo by Yoshiaki Nakamura

姫野：前に内倉さんからこのシリーズの一部を見せていただいたときに、なんだか少し宗教画を思わせるところがありま
すねとお伝えしたんです。例えば双子の赤ちゃんや、あるいはこのラグビーですら、ある種の宗教画を思い起こ
したりしませんか？

ひとつは西洋によくありますが、キリスト教に関係した場面を思い起こさせる。それはもしかすると「浮遊感」が天
上界と響きあうこともあるかもしれませんが。何か特定の宗教性ではなくて、帯びている精神性というか、憧れと
いうか、憧憬¹（どうけい）というか、そういったものが重なってくる感覚があるなと思ったんです。

特にこのラグビーの作品ですが、ラグビーだとこのポーズは珍しくない場面でも、俯瞰から撮ったことによって、
なにかひとつそういったものが浮かび上がってくるような気がするんです。いくつかの写真で同じことを思っ
て見えていました。宗教絵画を積極的に参照しながら作品をつくるタイプの方もいますよね。内倉さんはそういう方へは
いけないと思いながらも、この取り入れ方はとても興味深かったです。



The Floating Portrait #004

2022 | archival pigment print | 1188 × 792 mm

© Shinichiro Uchikura, courtesy KANA KAWANISHI GALLERY



The Floating Portrait #008

2022 | archival pigment print | 592 × 394 mm

© Shinichiro Uchikura, courtesy KANA KAWANISHI GALLERY

¹ 憧憬（どうけい）：「憧れること」「憧れ」を意味する。
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%86%A7%E6%86%AC>

内倉：ありがとうございます。実は、僕も似たことを感じていました。お寺の暗闇で周りのものが消えていくなかで、仏像が神々しく光って浮かび上がってくるような。ただ、そのことをお話するのはどうなのかと思いお伝えしていなかったのですが。

姫野：宗教を超越しているというのはそういう意味でもあって、仏像の一体だとか、あるいはラグビーの作品も、私にはこれが光背²のような印象も受けるんですよね。西洋の印象も、仏教の印象もある、そういった複雑もありますし、精神的な何かを濃く感じさせるものでもありますよね。

内倉：このシリーズを制作しはじめた当初は、コミカルでクスツと笑えるシリーズだなと自分では思っていたんです。でも撮りつづけていくなかでその意識がなくなってきた、先ほどお伝えしたように仏像に見えてきたりと、自分の視線が変わってきたんですよね。

姫野：そのボクサーの方がキックしている作品は特に浮遊感が強いんですよね。なおかつ、風神雷神のようなそういったことを思わせますよね。そういう意味でいうと、逆にはじめからわからないなと思っていたのはこちらのベットの寝ている高校生です。寝起きの高校生が制服に着替えながら、朝の支度を急いでいるのですが、これが私には一番わかりにくかったんですよね。ただ、これまで大きなプリントで拝見したことがなかったので、今日ここでみると印象が違った。

前は内倉さんがおっしゃったように人類のなかの高校生というジャンルのクスツと笑える瞬間を写していると思っていたんだけど、これに関していうと布団ごと浮遊している感じがありますよね(笑)。その布団ごとの浮遊感というのが周りの黒の面積とうまく合っているんだと思うんですよ。それはパソコンの画面で見ているだけだと体感できなかったことなんだけど。だから、やはりこの作り方はうまいなとすごく思いました。



The Floating Portrait #023
2022 | archival pigment print | 592 × 394 mm
© Shinichiro Uchikura, courtesy KANA KAWANISHI GALLERY



The Floating Portrait #005
2022 | archival pigment print | 1188 × 792 mm
© Shinichiro Uchikura, courtesy KANA KAWANISHI GALLERY

河西：展覧会を準備するにあたって、まずはJPEGの画像で作品情報を共有いただくのですが、私も内倉さんのディレクションが薄いものの方が作品として純粋にその魅力を味わえる気がしていました。なので、ギャラリーの広報画像はどちらかというと、あまり内倉さんの手が入っていないものを多めに選ばせていただいていた。ただ、姫野さんのお話のとおり、大きいサイズで見ると、画面で見えていた印象とは違い、それらの作品も、他のものと同様に面白さがありますね。お話にあったとおり、人類というものを俯瞰で見たときのこの場面のおかしさを味わえているという感覚があります。

内倉：このほかに統一しているのは、顔に力を入れないということです。これがかなり難しいんです。みなさんとても大変な体勢をとってもらっているのに、顔が力んでしまうんですよね。そこはみなさんに頑張ってもらいました。

² 光背：仏像、仏画などの仏教美術や、キリスト教美術などにおいて、神仏や聖人の体から発せられる光明を視覚的に表現したもの。
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%85%89%E8%83%8C>

〈ポートレート〉

姫野：私が好きなのは、あの携帯を持っている女の子です。あれはいいですよ。なんというか、今このとき地球上から浮いてきた感じがすごくあるなと思って。この作品はシンプルなんですけどとても好きなんですよ。その下のボートは、なんだか三途の川を渡っているような感じがするじゃないですか。もう重力からは抜けて、どこかそういうところへ行きつつある感じが強いなと思います。



The Floating Portrait #020
2022 | archival pigment print | 592 × 394 mm
© Shinichiro Uchikura, courtesy KANA KAWANISHI GALLERY



The Floating Portrait #014
2022 | archival pigment print | 592 × 394 mm
© Shinichiro Uchikura, courtesy KANA KAWANISHI GALLERY

姫野：それから、この展示空間にはふたり組の作品がいくつかありますね。こちらの女性おふたりはどのようなご関係があるのでしょうか。

内倉：このおふたりはご友人同士で、それぞれ旦那さんがいます。ただ、撮影依頼をしたときに、僕にはただの友人というより、お互いに好き同士で恋愛関係のように見えたので、このポージングは僕が提案しました。人間は男と女だけじゃなくて、いろんな形があるよねということです。

河西：溶け合うかのようにひとつになっていますよね、血のつながりがあるようにも感じます。

姫野：そうですね。それくらいの親密な関係に見えました。



The Floating Portrait #009

2022 | archival pigment print | 592 × 394 mm | © Shinichiro Uchikura, courtesy KANA KAWANISHI GALLERY

姫野：『私の肖像』の最後には、セルフポートレートが1枚あるんです。私はそれが名作だと思っているのですが、こちらのおふたりの女性の作品を見ながらそれを思い出しました。

上海の作家で、キュレーターのジョアンナ・フーさんが、本書で内倉さんのポートレートについて書かれているのですが「このセルフポートレートに内倉のアーティストとしての覚悟や思考をみる」というような内容を書いてくださっていました。そういう意味で、内倉さんは真の自由さとか、あるカテゴライズされたものとか、関係性に囚われない部分がすごくあるなと思っていて、それが今回の『浮遊の肖像』のなかでもすごく息づいているなと思うんですよね。今後どうなっていくのかなと楽しみです。

内倉真一郎の肖像写真は、人間の顔と魂、外見と精神の間に裂け目を入れ、人間の皮膚の下に潜んでいる欲望と夢を垣間見させ、アイデンティティやジェンダーの複雑さと向き合うことを可能にする。

(中略)

内倉もまた、存在を巡る壮大な哲学的命題に、セルフポートレートで応えている。本書の最後の肖像として、内倉は他のすべての肖像とは相容れなさそうな、自身のヌードの肖像を提示している。これは彼の制作における徹底した率直さを示すだけでなく、必ず正真正銘のアートの作家として立とうという勇気をも示している。

彼自身のヌード写真には、男性の性徴はわざと隠され、両手の中の花とワイン、暗に示されたポーズにより、ジェンダーの流動性が表されている。ここで「自己」は、時代に許容されるかどうかは別として、世俗的な世界に挑戦し、突き破ろうとしている。言うまでもなく、多元的、包括的、複雑化する世界では、ジェンダーの平等と流動性が時代の重要な精神として、各国に広がっている。日本は無論、その時代精神をあたたく受け容れている国の一つだ。しかし、個人の選択の自由という意味では、時代や環境との戦いは、人間の本質や個人の力を主張するものであることに変わりはない。数十年前に遡れば、このような写真を撮るのはもっと勇気の要ることだっただろう。内倉が撮った自らのヌード写真には、1980年にアメリカの写真家、ロバート・メイプルソープが撮影したセルフポートレートと同じ精神が見てとれる。化粧や着こなし、表情、身振りなどによって男女の違いが入り混じった写真の中で、自らのジェンダーとアイデンティティが曖昧になっており、社会の中で確立された男女の概念に疑問を投げかけている。

内倉のセルフポートレートは、このシリーズの他の肖像作品とはスケールが異なるが、個々の人間の存在や人間性の複雑さを可視のものとして表現しようとする点において、創作の目的が一致している。すなわち、さまざまな肖像を通して、人間の外見と魂の裂け目を表現しようとしているのだ。



個展『私の肖像』(2020年、KANA KAWANISHI PHOTOGRAPHY) 展示風景
© Shinichiro Uchikura, courtesy KANA KAWANISHI GALLERY, photo by Yoshiaki Nakamura

内倉：ありがとうございます。褒められると伸びるタイプなのですごく嬉しいです(笑)。

一同：(笑)

姫野：それを伸びやかに作品にできている人はそんなにいらっしゃらないですけど、内倉さんの場合はそれがはじめから自分のなかにありますよね。それは素晴らしいことだと思いますよ。

〈質疑応答〉

河西：ではせっかくなので質問などある方いらっしゃいますか？

質問者1：内倉さんは続々と作品を作っていらっしゃいますよね。前回の作品の制作期間も、そのほかのシリーズの制作と重なっていたとお話されていましたが、今まで撮影をはじめてからやっぱり違うなと撮らなくなったシリーズなどもあるのでしょうか？

内倉：たしかに、制作のスパンが早いというのは言われたりします。特に作品を本として出版するとなると、そういう声はありますね(笑)。でも僕のなかではそれは普通のことなんです。作品を制作している作家にはいろいろな方がいますけど、例えば僕の場合は、写真館をやっているので週に一回水曜日だけお休みなんです。その日は子供たちが4時ごろに帰ってくるので、そのあとに家族でイオンに行って遊ぶのがルーティーンで(笑)。だから、僕が自由に動けるのは6時から15時まで。そこが勝負なんです。

その時間に何をどう撮ってやろうということはもう決めているので、それまでの1週間は仕事に集中して、ふつふつと溜まった言いようのない作品への想いをその制作の時間へ向けるんです。好きなものなら徹底して集中して撮るようにしています。他の作家さんで、1つの作品をつくるのに1年以上の時間をかけている方もいらっしゃいますが、それは僕には関係ないんですよね。だから、面白いと思ったらすぐに撮ってみる。最初にカラーかモノクロかなどを決めて撮ってみると、始まったら止まらなくなるという感じで、またすぐに撮りたくなるけどその想いを溜めて、次の週に向けるということをつづけているだけです。



photo by Yoshiaki Nakamura

撮ってみたけどやっぱり止めたということも、もちろんあります。田舎だろうがどこであろうが面白いものはどこにでも転がっているけれど、そのときの自分には面白いものが撮れなかったということですよね。だから撮れなかった自分も素直に受け止めるということを大切にしています。そしてまた次の撮影まで溜めていく。良いものが撮れなかったときは、そのあとに家族みんなでご飯を食べにいくとも言葉数が減ります(笑)。ただ、逆にいいものが撮れたときはすごく上機嫌になります。

姫野: そうなんですね。すごくわかりやすいですね(笑)。

河西: 今のお話は私にも刺さりました。

姫野: そうですね。写真館の仕事がありながら、今までの作品もこうやって本にまとめていることがすごいですよね。しかも、本にすることで今までの作品のつながりが見えてきますから。

河西: 他にご質問のある方はいらっしゃいますか？

質問者2: 光を下から当てることで空間の認識を狂わせるという手法がとてもシンプルで力強いなと感じました。宇宙空間に浮いている惑星のように見えて、姫野さんのお話にもあったように人間の地平ではなく宇宙へ弾き飛ばされているようにも見えて。僕もこの作品を見ていて、じわじわと癒される感覚がしました。ひとつ質問なのですが、俯瞰してご自分を撮るということを『私の肖像』ではされていますが、今回のシリーズではされていないのでしょうか？技術的にも難しいと思うのですが、そういったご予定があるかお聞かせください。

内倉: ありがとうございます。展示はしていないですけど実は撮っているんですよ。「こいのぼりと僕」という感じで。写真館なのでいろんなものがあるんですけど、2.5メートルくらいのかかなり大きなこいのぼりを使いました。ただ、撮ってみてなんか違うなと、こいのぼりじゃないよなと思ひまして(笑)。それをやりながら、セルフポートレートシリーズをこの年でやったらどんなことになるのかなと考えていたりもしました。

河西: なんでそこで「カメラ」を使わないんですか？

姫野: たしかにその質問はもっともですよ。だって内倉さんといえばまさに「カメラ」ですからね。

内倉: 僕はカメラを持っている姿が似合わないなと自分では思っているんです。

一同: (笑)

内倉: すごく申し訳ないんですけど僕のなかでのカメラマンのイメージってこれなんです。必要以上に機材やカメラをたくさん持って、なぜかいつも脚立もあって、着ているネルシャツの裾がフレームに入らないようにきちんとパンツに入れていて。頭にバンダナを巻くのもそうですけど、僕のなかでのカメラマンは本当にこのイメージなんです。だから、僕がカメラを持つのは違うかなと思っていました。例えば、ほかの方が俯瞰でこのシリーズを撮って見たら、すごくカッコいい方がカメラマンとして写っているかもしれませんけど。



The Floating Portrait #021

2022 | archival pigment print | 592 × 394 mm | © Shinichiro Uchikura, courtesy KANA KAWANISHI GALLERY

姫野：いまのお話は結構衝撃的でした(笑)。ただ、『私の肖像』でのセルフポートレートでワインと花を持っていたのは、そういうお考えがあつてのことだったんだなと納得しました。

河西：そうですね、なんだかとても腑におちました。それでは、このあたりでトークを終了とさせていただきます。みなさまありがとうございました。

文・編集・ウェブアーカイブ／小林萌子 (KANA KAWANISHI ART OFFICE LLC.)
文責／河西香奈 (KANA KAWANISHI ART OFFICE LLC.)